

Ⅰ 研究主題

共に学びを広げていく力を育む

フェーズⅠ:「まず自分で考えられる姿」の実現

2 令和6年度までの成果(全国学力学習状況調査より)

(Ⅰ) 前期課程

令和6年度全国学力学習状況調査(前期課程)において、比較的成果が見られたのは以下の点である。

国語科における、「日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができるかどうかをみる出題」(3四)について、81.3%の正答率(県:72.4%、全国:74.6%)と成果が見られた。これは、「読書」に関連した日常の取り組み(多読、図書室活用、図書学習部の取り組み等)があったおかげで、「読んだ本の記録をする」「読書を通した学び」についてイメージしやすかったことが考えられる。

また、算数科における、「問題場面の数量の関係を捉え、式に表すことができるかどうかをみる出題」Ⅰ(Ⅰ)について、65.6%の正答率(県:64.7%、全国:62.1%)と、成果が見られた。この結果から問題文をしっかりと読み取って、数量について正しくとらえていることが考えられる。

【原さんの読書の記録】

日付	題名	感想
4/10 - 4/11	大盗じいさんとガン	「いつまでも、いつまでも、見まもっていました。」という最後の一文が心に残った。残雪への気持ちの変化するところに感動した。
4/21 - 4/25	星の王子さま	キツネが「心で見なくちゃ」と語ったところが、形のないものの大切さを考えるきっかけになった。
4/27 - 4/28	はちまつのおはなし 「オニジをじいさんの顔にばさ」	「わしが食ってまきてるのはな、朝日のむかりだよ」という言葉に心があたかくなった。シリーズ他の作品も読みたい。
4月のふり返し		

- 1 読書を通して、学校図書館や地いきの図書館の利用の方法を知ることができたと気づいた。
- 2 読書を通して、科学的な事実について、疑問に思ったことを調べて解決できたと気づいた。
- 3 読書を通して、自分が文章を書くときに役に立つ書き方を学ぶことができたと気づいた。
- 4 読書を通して、自分の心にひびく言葉や今までになかった考えを見つけることができたと気づいた。

四 原さんは自分の記録を読み返し、気づいたことを、下の1から4までの中から一つ選んで、その番号を書きましょう。

1

ゆうまさんたちは、折り紙で遊んでいます。

- (1) ゆうまさんは、折り紙を72枚持っています。

ゆうまさんが持っている折り紙は、こはるさんが持っている折り紙より28枚少ないです。

こはるさんが持っている折り紙の枚数を求める式を、下のアからエまでのの中から1つ選んで、その記号を書きましょう。

ア $72 + 28$

イ $72 - 28$

ウ 72×28

エ $72 \div 28$

(2) 後期課程

令和6年度全国学力学習状況調査（後期課程）において、比較的成果が見られたのは以下の点である。

国語科における「行書の特徴を理解しているかどうかをみる出題」（4三）について、80.8%の正答率（県：71.2%、全国：75.6%）と成果が見られた。この結果から、「第Ⅰステージからの『かきかた』『書写』指導が第Ⅱ、Ⅲステージへ適切につながっている」「『書友』の取組、指導が生きている」「書くだけではなく、書体や筆運びについても理解ができています」ことが考えられる。

また、数学科における「与えられたデータから最頻値を求めることができるかどうかをみる出題」（7(1)）について、55.3%の正答率（県：57.2%、全国：55.5%）と成果があった。この結果から、ある程度情報量が多くても、すぐに答えを導ける（今回だったら「最頻値」を理解していれば、数を数えるだけ）なら問題なく解ける、つまり「知識があればすぐに答えが出る」課題については比較的成果を出せることが考えられる。

三 田中さんは、短歌を紹介するための資料の中に、テーマである「月と風景」を行書で書きました。次の⑦から⑭までの部分の書き方について説明したものとして最も適切なものを、あとの1から4までの中から一つ選びなさい。

1 ⑦の部分は、楷書とは異なり点画を連続して書いている。
 2 ⑧の部分は、楷書とは異なり点画を直線的に書いている。
 3 ⑨の部分は、楷書と同様に終筆を止めて書いている。
 4 ⑭の部分は、楷書と同様に点画を省略して書いている。

7 海斗さんと咲希さんは、安全性を高めるためにセンサーで障害物を感知して止まる自動車があることを知り、興味をもちました。そこで、車型ロボット用のプログラムによって走らせることのできる車型ロボットを使って実験をすることにしました。

車型ロボットの説明

- 障害物からの距離を測定できるセンサーがついている。

○ プログラムの②、④に値を入れることによって、車型ロボットの動きが変化する。

- ②は、進む速さまで設定できる。
- ④は、距離まで設定できる。

プログラム

段階②の速さで前に進む

海斗さんは、まずプログラムを②の速さで設定し、次のように走らせた。

海斗さんが設定したプログラム

段階①の速さで前に進む

図1

図2

10 cmの位置から進んだ距離について調べた結果

1.5	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	2.0	2.0
2.0	2.0	2.1	2.1	2.2	2.2	2.2	2.2	2.4	2.4

(単位：cm)

次の(1)から(3)までの各問いに答えなさい。

(1) 10 cmの位置から進んだ距離について調べた結果をもとに、10 cmの位置から進んだ距離の最頻値を求めなさい。

2 令和6年度までの課題(全国学力学習状況調査より)

(1) 前期課程

令和6年度全国学力学習状況調査(前期課程)において、課題が見られたのは以下の点である。

国語科における、「資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる出題」について、42.2%の正答率(県:53.9%、全国:52.9%)しか得ることができなかった。解答状況から「発言の意図を捉えられていない」「語彙力不足」「文字から映像をイメージする力がない」などの課題が散見された。

また、算数科における「序数が小数である場合の除法の計算をすることができるかどうかをみる出題」について、40.6%の正答率(県:75.6%、全国:70.1%)しか得ることができなかった。単純に、小数の計算についての理解が不十分だったとは考えられるが、「家から学校までの歩数」としてイメージさせて計算させる問題の特徴に影響を受けたことも考えられる。

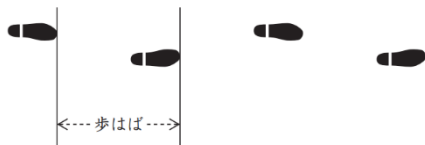
- (2) 和田さんは、村木さんの発言⑥を受けて、発言⑦のように話しました。和田さんくふうとして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選んで、その番号をよ
- 1 相手が興味をもっていることに気づき、相手の言葉を引用して話した。
 - 2 相手が興味をもっていることに気づき、用意していた実物を示しながら話した。
 - 3 相手が興味をもっていないことに気づき、言葉の意味を説明しながら話した。
 - 4 相手が興味をもっていないことに気づき、自分の体験を加えて話した。

4

あいなさんたちは、時間や速さなどについて考えています。

- (1) あいなさんは、家から学校までの歩数を求めます。

家から学校までの道のりは、540 mです。あいなさんの歩はばを0.6 mとします。



家から学校までの歩数は、 $540 \div 0.6$ の式で求めることができます。

$540 \div 0.6$ を計算しましょう。

二 和田さんは、「和田さんのメモ」を生かして、村木さんとオンラインで交流しました。次の「オンライン交流の様子の一部」

【オンライン交流の様子の一部】

深緑小学校 村木さん

海風小学校 和田さん

② はじめまして。深緑小学校の村木です。今日は、とても楽しみにしていました。

① はじめまして。海風小学校の和田です。よろしくお願いします。

③ メールありがとうございます。図書委員会のことを知りたいということでしたので、まず、海風小学校の図書委員会の取り組みのしょうかいで、読書イベントが、月に1回、図書委員会で、クイズなどをして、私もそれに参加して、今まで読んだことがない分野の本を読みました。

④ せっかく教えてもらったのですが、だれが何をしているのかが分からなくなったので、もう一度教えてもらえませんか。

⑤ 説明がよくなかったですね。話し方を変えますね。図書委員会が、月に1回、クイズなどの読書イベントをしてくれます。私もクイズに参加しました。今まで読んだことがない分野の本を読むことができました。

⑥ よく分かりました。おもしろそうですね。

⑦ そうなんです。先月の読書イベントでは、図書委員がさまざまな分野から本を選び、本の内容からクイズを出題してくれました。これが、実際に出题されたクイズが書かれたカードです。私も参加することで、科学の本に興味をもつことができました。

(2) 後期課程

令和6年度全国学力学習状況調査（後期課程）において、課題が見られたのは以下の点である。

国語科における「話し合いの話題や展開を捉えながら、他者の発言と結び付けて自分の考えをまとめることができるかどうかをみる出題」について、32.7%の正答率（県：41.9%、全国：44.7%）しか得ることができなかった。

また、数学科における「事象を角の大きさに着目して観察し、問題解決の過程や結果を振り返り、新たな性質を見出すことができるかどうかをみる出題」について、15.4%の正答率（県：28.1%、全国：26.7%）しか得ることができなかった。回答状況から「途中で諦めてしまっている（無回答）」「イメージする力」「イメージを補うために書き込むなどの工夫」にも課題が見られた。

- 9 線分ABがあります。線分AB上に点Cをとり、AC、CBをそれぞれ1辺とする正三角形PAC、QCBを、線分ABについて同じ側につくります。そして、点Aと点Q、点Bと点Pを結びます。ただし、点Cは点A、Bと重ならないものとします。
- 桃子さんは次の図1のように点Cをとり、健太さんは次の図2のように線分ABの中点に点Cをとりました。

図1

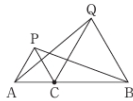
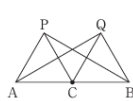
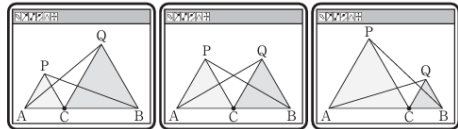


図2



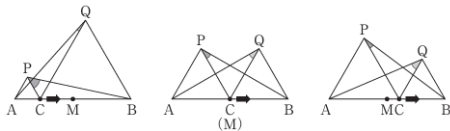
二人は図1と図2を観察し、線分や角についていえることがないか気になりました。そこで、コンピュータを使って点Cを動かしながら調べました。



- (2) 健太さんは、線分ABの中点に点Cをとった場合に $\angle AQC$ と $\angle BPC$ が等しく見えたことから、他の場合にはどうなるか気になりました。

そこで、次の図3のように、線分ABの中点をMとして、点Aから点Bの方向へ点Cを動かした場合に $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の大きさがどうなるかを調べ、下のようまとめました。

図3



調べたこと

- 点Cが点Aから点Bに近づくにつれて、 $\angle AQC$ は大きくなり、 $\angle BPC$ は小さくなる。
- 点Cが線分ABの中点のとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ は等しく、どちらも 30° である。

健太さんは、前ページの調べたことから、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の和について何かいえることがないか考えています。

このとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の和について、次のことがいえます。

- ◎ 点Cが点Aと中点Mの間にあるとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の和は 。
- ◎ 点Cが中点Mと点Bの間にあるとき、 $\angle AQC$ と $\angle BPC$ の和は 。

上の 、 のそれぞれに当てはまるものを、下のアからエまでの中から1つずつ選びなさい。

- ア 60° より大きい
- イ 60° より小さい
- ウ 60° になる
- エ 60° より大きいことも小さいこともある

※ 左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

条件1 フィルターバブル現象の特徴について取り上げながら、これからどのように本を選びたいかを具体的に書くこと。

条件2 「話し合いの一部」の誰の発言と結び付くのが分かるように書くこと。

四 「話し合いの一部」の山岡さんの最後の発言を受けて、あなたならどのような考えを述べますか。次の条件1と条件2にしたがって、実際に話すように書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

3 令和6年度までの成果と課題(令和6年度第5回学校運営協議会議事録より)

- ・つながる力やコミュニケーション力を高めさせたい。ここで活動することが増えてきているので、「共に」をキーワードとしていきたい。また、自主性を育て、自分から動く子どもたちを育てたい。子どもの育ちは、家庭の力が大きい。・・・
- ・子どもの学習意欲をもっと高めたい。第Ⅰステージは学習の基礎・基盤を整える時期であるが、座り方や最後まで話を聞く等の力を高めたい。
- ・子どもの個性を伸ばす環境づくりが大切である。自分から好きなことを見つける力を育成したい。子どものやる気を高めたり、自分の可能性を見つけたりする場を地域でも作っていききたい。また、家庭環境や親の意識もさまざまである。保護者の教育に対する意識を高める場も重要である。・・・
- ・東条学園の子どもたちは、素直な子どもたちが多い反面、自分から進んで取り組んだり、チャレンジしたりすることに躊躇する面がある。自分で考えて、行動し、失敗しても認められる場や地域との連携が必要だと考える

4 令和6年度までの課題(教職員アンケート及び全体校内研修会と研究推進委員会記録より)

<成果> ※詳細「令和4・5・6年度 学校経営研究発表会研究紀要」P25参照

- ・「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすること(広げたりすること)ができています」と多くの児童生徒が感じている。

<現状の課題>

① 基礎学力の定着 ※全国学力学習状況調査／総合学力調査分析の結果より

② 自分で考える力が弱い

△自分で考えようとしていない。考える前に聞いてしまう。

△知識や答えだけ分かっていると思っている。答えにたどり着く過程や知識を生かそうという意識低

△見直しをしない △答えを待っている

△国語:書いていない感情を読み取れない。文章を読む力がない。語彙力不足。行間を読む力がない。

※単なる言葉上の読解力、語彙力というよりも、経験や体験に裏付けられた読解力、語彙力に欠ける

△社会:答えのないものを予想できない

△算数／数学:図が書けない。公式を覚えて終わり。

△英語:自分で工夫して文がつかれない。もらっている資料を見ない。すぐに先生を頼る。

I want to～の時に、何を書いたらいいのか答えられない。イメージ発信ができない。

△作文:したことは書けるが、気持ちが書けない。

△体育:ルールの共有の仕方が難しい。

△音楽:学年が上になればなるほど言えない。体、顔、絵で表現させたいができていない。

△通級:想像する力が弱いので、先や流れがわからずに落ち着かない。

③ 考えるため、個人思考するための材料が備わっていない

△たくさんのヒントがあっても、自分の考えをもてない。 △課題に向けて考えない。

△見通しを持つ力がない

※前期課程でのノート指導をはじめ、「考えるための取組」が1年生から6年生まではしっかりつながっている。

※しかし、後期課程がしっかりその取り組みを受け止められていない現状があるのではないかな。

5 研究の方向性と方法

「1人1授業公開」

「まず自分で考えられる」姿を成長・実現する授業を提案、公開

- ・授業者自身で公開する教科（前期）、単元、日時を決定。
- ・授業参観及び事前研・事後研修参加は実施学年（層）を中心に行う。
- ・年間最大10回の講師招聘が可能。「1人1授業公開」のうち国語2名、算数／数学で2名、その他教科で4名、指導案を検討する段階から助言をいただく計画。また、国・算の講師から、1回ずつ講演をいただく予定。（☆全体校内研修会）
- ・講師招聘する研究授業は、3つの部会に分かれて部会ごとに事前研・事後研究を行う。（該当の部会ではない職員も、授業参観、事後研の参加を積極的に行っていき、研修を深める。）

「東条学園の教育」

「自分で考えられる」ようになるための基礎学力の定着、向上

- ・年間指導計画に、注力する課題をもとに特に工夫する単元を明記。
- ・加東市学力調査で明らかになった課題を基に3月に「弱点克服」実施を明記。

「家庭学習の手引き」

「自分で学びを広げる」力を家庭と協力して定着、向上

- ・学校オープンに合わせて「自主学習強化週間」を実施。
- ・その取り組みの内容や手助けとなるページを作成。
- ・紙面について、しっかり検討する機会（研究推進委員会）をとる。
- ・1年かけて紙面を見直す。

「朝の10分間『学園タイム』の活用」

「スピーチ活動」を実施し、聴いて想像する力の定着、向上

- ・自分でスピーチ内容を考えて発表する。
- ・「失敗しても一生懸命なら大丈夫」共に学ぶ場づくり。